

45 「𪗇」(義未詳)の解釈

杉本茂春

𪗇は、『字彙』には収録されていないけれども、『字彙補』に初出する。

『字彙』は明の梅膺祚撰、万曆四十二年(二六一五)刊行され、字画を以て分類された最初の字書という。明も最盛期を越え、漢字の世界も分化、システム化がすすみ、一画より一七画に至るまで、二一四部に列して三三一七九字を整理と配列。怪僻の文字はすべて録せず、整理・省略した。

その後、明は滅び(二六六二)、清興るや(二六六二)呉任臣は先に記録から消し去った怪僻、怪しく正常でない、僻み、ひねくれて、片すみに避け退いた字をも収録して、続補を撰し、『字彙補』とした。

私は『字彙補』を直接披見することはできなかったが、

𪗇が『康熙字典』に収められてあることを確認し、そのつくり(旁)、宀を説文によって調べた。

宀は、唐韻・正韻にジョウ(而隴切)。韻会にニョウ(乳勇切)、集韻にニョウ(乳勇切)またはジョウ(戎用切)。

康熙字典によると、宀は説文に、

散也从ウ人在屋下無田事 而隴切

とみえるという。また、正字通にそれぞれ見解が収められていることもわかった。

改めて、説文をひくと、

宀 椽也从ウ人在屋下無田事

周書曰宮中之宀食而隴切

とあって、宀は椽である。人と家形によって、人(男性)が昼日中、屋根の下、屋内にいて農作業を営んでいること、さらに周書には、宮廷に勤務していて、一時職務を解かれて休息しているところ。

さらに説文には、

椒 分離也 鯨肝切

： 分 別也

刀で肉を切りわけける。

離 黄倉庚也 鳴則蚕生 呂支切

黄倉庚は「ちょうせんうぐいす」のこと。この鳥がさえずりはじめるころになると、春蚕を掃きたてるとある。

『説文解字詁林』には、諸氏の説を掲げて、離黄・倉庚・商庚・鸚黄など、地方によって呼び名が異なるとある。なかでも段注は、

今用鸚黄借離為離別也

広く分布する地方によって呼び名の異なる小鳥の名を借りて、はなればなれという意味に用いると解釈している。

多少の疑問はあるけれども、康熙字典を信頼して一気に『新字源』によって散をみる。もと、竹をわりさく、ひいて、ばらばらにする意を表したが、のち、肉(月)と椒(サ

シ)、麻をくだきわけける意とから成る散に変わり、さらに散の字形となった。

国語学、漢字学にのめりこむことなく、信すべき字典を信頼して、すなおに林を散とうけとめると、

冗は、散。

儿は、兄(子のかみ)の儿、人のうえにたつ人。主人(男)が家の中に在って、なすこともなくぶらぶらして、屋外、田畑にでて耕作に従事してないこと。

宮廷・官庁の職員に有給休暇を与える、または、予備要員として有給職員を召し抱えておくこと。冗費・冗員と同じで、むだなついえ、余分、過剰を意味すると理解できた。

結論

訛は、過剰歯。

齒列外に位置していて、齒としての主たる機能、咀嚼を営まない、正常の齒ではない齒ということになった。

上顎左右の中切齒間、正中部口蓋に出齧する円錐状過剰歯はよく知られている。また、臼旁歯など齒列外に孤立する過剰歯をみかける。齒の奇形であろう。

明と清の滅亡・興隆、交替期、異民族間の混血もさかんで、齒の奇形も多発したのではあるまいか。

(大阪市)

46 囉囉拏説救療小兒疾病經の紹介

大 高 興

本經は、いわゆる密教の經典であつて、現在の最も代表的な大藏經である大正新脩大藏經(全百卷)の中の「印度撰述部の中の密教部」に収録されているものである。

この經本は、清の雍正十三年(西曆一七三五年)に勅を以つて製作された「清版大藏經」(別名「竜藏」)の一本であるらしく、その「經」部に属し、「臨」の部四十經同函の中の第二冊目であろうと推定される(実物を展示予定)。

この清版大藏經は、わが国にあつては、ひとり京都の竜谷大学にのみ襲藏されている珍籍といわれているが、当本は、昭和三十四年三月、青森県弘前市の某寺から、同市内の花田骨董店に渡つた中の一冊である。

訳者、法賢は、北天竺、カシミール出身の梵僧で、宗の